

教師を励ます実践思想と技術とは何かを明らかにしよう
～子どもとの出会い直しの先にある楽しい世界への展望～

1 はじめに

「令和の日本型学校教育を実現していくため、時代の変化に応じた質の高い教師を確保するためには、より一層の働き方改革の推進や処遇の在り方の検討を進めることに加え、教職を目指す学生や社会人の方に、現職の教師が前向きに取り組んでいる姿を知ってもらうことが重要です」

SNS上でリレー形式に教師の声を繋いでいく「#教師のバトンプロジェクト」^{*1}はこのような触れ込みで始まった。

しかし当初の想定や設置者側の思惑に反して、掲示板には現場からの悲痛な声が氾濫し、社会的に大きな反響を呼んだ。

「もし今タイムリープができるなら絶対に大学生に戻ります。一般企業に就職しなさいと何時間でも何日でも当時の自分を説得します」

「三年勤めて精神疾患になりました。土日休めない。毎日残業。毎月九十時間近くの時間外労働。死にたいってずっと思ってた」。

書籍やテレビのニュースで教師の過酷な勤務状況が取り上げられることは昨今珍しくなくなったが、「#教師のバトン」を企画した文科省の意図とは反する形で、誰の遮りにもあうことなく教師の言葉が世間の目に触れたことによって、「教師の仕事は大変らしい」という言説に説得力を持たせてしまう結果になった。

このようなことが話題になる中で、全国的な教師不足が問題化していくこととなる。2021年度当初、学校で教員の配置が定数に満たない状況がニュースであちらこちらで報じられたのも記憶に新しい。

京都市でも教職員が不足する状況は全国と変わらない。教職員不足に繋がる要因の1つである早期退職を例に取れば、2021年度をもって京都市を退職した教職員の半数近くは定年を待たずに退職した教職員だという。離職には様々な理由はあろうが、家庭の事情により継続した勤務が難しく退職したり、他職と比較し条件面を考え、躊躇なく辞めていく例も珍しくない。

「学校でこのさき働き続けるのは無理だ、、、」と「#教師のバトン」上で言葉を発する声の主はどのような教師なのだろう。職場を去るという選択をする教師と、同じ環境の学校で働く教師である以上他人事ではなく、教師のバトン上で言葉を発するの主については考える必要がある。なぜなら「バトン上」の声の主は自分の代弁者なのかもしれないのだから。

2 教師が学校を諦めるとき

私たちが働く学校は、新自由主義的な競争原理を積極的に取り入れ、自己責任と競争の中で、働く人間としての資質能力を備えた「人材」を効率よく育てる場である。このような場では、ルールが厳格に定められ、学校スタンダードの力を存分に使用しながら指導が進められる。そして、学校が掲げる目標実現のため、定められた枠の中に収まることを子どもたちに要求する。これが多忙な働き方を

*1「#教師のバトンプロジェクト」https://www.mext.go.jp/mext_01301.html

教師に強いてまで作られようとする学校だと全国生活指導研究協議会2020年度基調^{*2}は指摘した。また2017年度京生研基調^{*3}では、このような管理統制を強化し枠を狭めゆく学校を「狭量化する学校」という言葉で表した。

狭量化する不寛容な学校の中で過ごす子どもは、高いストレスを抱えることになり、しんどさを先鋭化させる子は不登校という形で学校から姿を消していく。「2020年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」^{*4}によると、小・中・高等学校等における不登校児童生徒数は23万9,178人と過去最多となったという。多くの不登校生徒が生み出される背景には、狭量化する学校世界が関係していると思われる。

しかし、狭量化が起因するこのような現象は、果たして子どもたちだけに起こることなのであろうか。子どもたちと同じ学校を日常にするのは教師も同じである。だとすれば、学校から撤退する教師の背景にも、子どもたちと共通する原因があると考えるのは自然なことであろう。例えば、狭量化を実現していく過程の中に、実は教師自身を苦しめるものがあるのではないかと。

先ほど、狭量化する学校ではスタンダードを管理統制の一助とし指導を進めると記したが、もともとスタンダードに基づく指導は例えば発達に課題のある子や、生育歴の中で傷付きを抱えた子に刃を向けるものと考えられていた。しかし、時間の経過とともに、今の学校状況を受け入れ、スタンダードを抛り所にして教壇に立つ教師にもその刃を向け出しているのではなだろうか。少々行きすぎた考えなのかもしれないが、狭量化しゆく学校を良しとせず、四苦八苦しながらも子どもの声に応答しようと奮闘する教師が、ここまで述べてきたような学校を理由に撤退することなく、今も旺盛に実践し続けているのを見るとそう感じられてならない。

学校の狭量化やスタンダードは教師にどのような影響を及ぼすのだろう。

3 スタンダードが教師に与えるもの

教師の仕事は「感情労働」という職種に分類されるという。感情労働とは「労働者が労働場面において、その職業や状況にふさわしい言動が求められ、常に自己の感情の管理を余儀なくされる労働形態」を指すと言われる職種だ。^{*5}教師には保護者の前で「学校としては、、、」など自分の意に介さないことも表情を作りながら伝えたり、教師として子どもの前で見せる「あるべき姿」が存在したりすると一般的には考えられている。このような職業では自らの感情を制御し、職務上適切なあり方を体現し続けることによる精神的負担が大きい。肉体労働や知的労働よりもメンタル面での回復が困難であることも指摘されている。また、個人の内的活動の領域である感情管理が、雇用組織によって管理統制されることで、労働者は自己の感情が自分自身のものであると認識が出来なくなる「自己疎外」に陥る危険性があるといわれる。これも教師にあてはめるなら「生徒には毅然とした態度で接して下さい」と管理職などに言われ、目の前の子どもの事情を抜きにマニュアル（スタンダード）に則った生徒指導を遂行する教師の姿と重なり、その際に心の中でどのようなことが起こっているかの示唆を与えてくれる。

目の前にいる子どもは千差万別で、それぞれの子どもから感じられることもまた千差万別であるはずだ。それは子どもによって指導が変わることを意味するが、感情管理は子どもを前にして内発的に

*2 「全国生活指導研究協議会2020年度基調」生活指導2020 8-9月号掲載

*3 「2017年度京生研基調」2017年Kの世界夏号掲載

*4 「2020年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf

*5 管理される心—感情が商品になるとき 単行本 - 2000/4/1 A.R. ホックシールド (著)

湧き出てくる感情を拠り所とした指導を教師に許さない。そうすると、教師は内発的な感情に目を瞑らざるを得なくなり、雇用組織から提示される「あるべき姿」が示された〇〇スタンダードに更に頼るようになるのである。

このスタンダードへの依拠が自己疎外へと繋がることは2021年度近畿基調のスタンダードに邁進する教師の描写からも言い切ることができよう。

「皮肉なことに、スタンダードに真面目に取り組めば取り組むほど、そこで為される「教育的行為」の担い手は「貴方である必要」はなくなる。誰にでもできるはずの行為だからである。結果として、スタンダードの追求は「貴方の代わりはいくらでもいる」という状況を結果する。それは、教師自身の自己の尊厳の否定に他ならない」

また、2021年京生研基調⁶ではすでに

「教師の生きづらさの一つは、教師をして、スタンダードを指導する末端の管理者に成り下がってしまうことにある。教師の当事者性が失われた今、スタンダードを指導することが教師としての責務を果たしていることだと感じとらざるを得ない職場状況を生きている」

と学校の狭量化の中で用いられるスタンダード使用によって教師が自己疎外に至る姿を指摘している。

狭量化する学校を受け入れ、感情労働者としてスタンダードへの依拠が強い教師ほど自己疎外が生じる。スタンダードの広がり依存が教師の感情労働としての側面を強め、そして決して楽ではない過密な学校の仕事が自己疎外に拍車をかける形で教師に襲いかかってくるのである。「毅然とした指導」を求められてもどうしても従うことができず、そのため批判の対象となってしまうような教師とは、今まで対極にいたと思われていた教師が、実は撤退の声を上げる主になり得ることをここに見ることができるのである。

4 秦実践に見る今の私たちに必要な実践の視点

京都市内で小学校に勤務する秦も、約10年前、感情管理から自己疎外に陥り仕事を辞めたいと思った経験を持つ教師の一人である。⁷

龍という非常に重たい課題のある子どもをその時秦は担任した。龍の父親は絵に描いたような元つっぱりで、近所でも恐れられた存在だった。中学卒業後父は就職し働いていることもあり、子どもも高校に行く必要もない。だから勉強してはいけないという教育方針を持っていた。そのため龍は学力が低く、漢字も1年生程度のものしか書けない。授業中もパーカーを被りずっと頭を伏せている。本人は格闘技を習っており、他校にも友達が多く、逆らう子がいればみんなでリンチである。当然みんなからは恐れられ、教師も彼の課題の大きさ故に関われる者がおらず、今まで学校に相手にされないまま6年生になった。

秦は彼の今まで刻まれてきた傷を手当をするように、クイズを学習に取り入れたり、話し合いをたくさん行ったりして、寝て一日を過ごしていた龍に優しく配慮に満ちた実践を進めていく。学校を巻き込んで秦が企画した※「お店屋さんごっこ」のお化け屋敷で龍は活躍し、このような楽しい活動を

*6 「2021年京生研基調」2021年Kの世界夏号掲載

*7 ここでの話は2022年5月21日に行われた講演「子ども側に立つ教師として生きていくために」による

通して、徐々に子どもらしさを取り戻していった。

しかし良好に築きつつあった彼との関係は、養護教員と龍との間で起きたトラブルによって一転することになる。それまでは秦の指導のもと、穏やかに学校生活を送っていた龍が立て続けにトラブルを起こすようになったのだ。更に龍に便乗してたくさんの子どもの今までの恨みを晴らすように、秦以外の教師に反抗するようになった。教室の窓から外を歩いている教師に向かって物が投げられたり、教室の様子を見に来た校長に龍が「帰れ」と言ったりするなど対教師に向かっての反抗が止まらなくなった。為す術のない管理職の批難の矛先は秦へ向かうことになる。毎日毎日秦は校長室に呼び出され、これまでの指導を「甘すぎる」「お前がしっかりやらないからだ」と断罪された。そして龍に保健室で勉強させたり、科学クラブで楽しい活動をしたりすることを禁じられた。始めは抵抗した秦だが、管理職に恫喝まがいの指導をしつこく受けたことで、方針を180度変えざるを得なくなった。学校の生徒指導方針に従い、龍を放っておくことを選ばされたのだ。

信頼を裏切られた龍の反発は凄まじかった。スリッパを投げつけ怒声を秦に浴びせた。秦にとって今まで経験したことがない、つらい日々が続く。また、彼を裏切ってしまったという罪悪感から秦は学校を辞めたいと本気で思った。心ここにあらずの日々である。そんな時、藁をも掴む気持ちでサークルの仲間と秦は相談する。深夜にも及ぶ仲間による丁寧なアドバイスは彼に学校の方針と決別する道を選ばせた。秦は龍に方針を変えたことを謝り、二度と裏切らないことを約束した。管理職に背いて最後まで龍に関わり続ける決意を彼に伝えたのだ。

その結果龍は落ち着きを取り戻し、クラスの中で最後まで楽しく過ごし卒業していくことができた。管理職に従って、龍を見捨てるような指導を最後まで行っていたら決して訪れなかった結実である。

秦はこのような厳しい実践を通してその後、「楽しい学校って作れることを知った」と話している。この経験を原体験として秦はその後も困難な課題を抱えた子をクラスを中心に据えた実践を行っていくようになったのである。

一方でこのような経験をしなくてもなお、子どもを排除しそうになる自分に身を委ねそうになることもあると言う。それほど教師を感情管理の道に引きずり込もうとする力は強い。秦はいかにして、子どもに寄り添い続ける実践に踏みとどまり続けていられるのか。彼の実践から見いだされる視点は、学校からの撤退を考える教師たちにまったく違う学校世界を想像されるものとなるだろう。

2021年度の秦実践「それぞれのストーリーが絡み合って、また進んでいく」から、今私たちに大きな示唆を与える実践視点を見いだしていこう。

1) ぶれない実践を行うために、4月当初指針となる方針を持つ

子どもに向き合おうとする教師はその子の課題が大きければ大きいほど様々な軋轢の中に身を置くこととなる。^{*8}この軋轢が、実践をブレさせ、実践者に時に子どもを裏切るような選択をさせてしまう。軋轢を乗り越えることは簡単ではない。

秦は実践においてクラスがスタートする前に必ず方針を立てる。今実践では、①トラブルが起これば、どちらが悪いか決めつけずに話を聞き、お互いがどう思っていたのかを出し合っていくこと②活動を取り入れて、子どもたちの活躍と承認の場をつくること③一人の問題をみんなの問題として考えていけるようにすること、という3つの方針を立ててクラスをスタートさせた。

秦のクラスには暴力的な言動が目立つルナ、昨年クラスを荒れさせていた中心人物であるダイキなど対他関係の中で必ずトラブルを起こすことが想定される子どもたちがたくさんいる。通常、トラブルは起こらないようにするための指導が徹底される。しかし、秦は「トラブルは起こるもの」という前

*8 軋轢については2013年「全生研55回京都大会基調報告・紀要版（文責：藤木祥史）」参照

提に立つ。そして起こったトラブルを個人の問題として取り扱わない。ケンカをした子の「そうせざるをえなかった」理由や泣いている子の背景にある「願い」をみんなで考え、読み解いたことを足がかりに、誰もが安心して過ごせる楽しいクラスに集団を発展させていくことを構想する。これはそのための3つの方針なのである。

秦の実践は、一貫して方針通りに進められる。年度当初に指導方針を持つことは、場当たりの個別指導を防ぐばかりか、一年を通して何度となく立たされる実践の分岐点において、常にぶれない自分、軌轢に負けない自分であるための非常に重要なポイントなのである。

2) 学校を相対化するために誰を実践構想の中心に位置づけるのか

秦実践において注目すべきは、不登校のネネを構想の中に位置づけていることである。非行問題を抱える子とは違い、不登校生徒は放っておいても学校を揺るがすような影響力を持たないことから、学校からは最低限の家庭連絡と最小限の登校刺激のみに働きかけは留まり、学級生徒たちに状況をつぶさに伝えられることもない。昨年までそのような状況にあった不登校ネネを学級に取り戻すことを秦は企図する。

発達上の重い課題や苦悩を背負わされ沈黙するネネは、狭まる学校の枠に対応しきれず集団から排除の対象となってしまうような子どもである。また、自己責任と競争が渦巻き、個々に分断された子どもの世界では最も傷つきやすい子ですらある。つまり現在の学校において、ネネのような不登校の子には集団側の課題が抑圧となって一心にのし掛かかっていると見ることができる。ネネへの取り組みを通して、秦は抑圧となる学校側を問題視し誰もが楽しく過ごせる学校へと変革を切り拓こうとしているのである。

同時平行して、年度当初に掲げた方針に則って学級内に起こるトラブルから子どもの言葉を拾い上げ、背景にある思いを読み解き学級内に広げていく。子どもたちはこのようにお互いの思いを知る経験を経て、ネネのような学校に来ないことを選択する自分とは違う状況の子を受け入れる素地を作っていくのである。この素地ができていくことが、集団側の変革の兆しといえる。

また、何とかクラスとの接点を作り出そうと、「お手紙」「タブレットで映像を作ってネネに見せる」などの子どもたちどうしが繋がり合う取り組みを構想することは、教師の多忙化や学びの多様化を言い訳に、問題化しない者は（問題化しなければ）放置されるという学校状況と対峙する秦の強い姿勢の現れである。

3) 教師の内的葛藤を越える

不登校ネネはもちろん、ルナ・ダイキのような課題の大きな子を構想の中に据え実践する。学校を相対化し、課題の大きな子たちの要求から学校を変革させていく。言葉では簡単に言えるが、いざその通りの実践を行うことは相当な難しさを伴う。子どもたちは同じような失敗や、同じようなトラブルを何度となく繰り返す。教師の寛容さを試すかのような行為である。実践者としては腹が立つこともしばしばあって、声を荒げてしまうことは多くの教師が経験することだろう。

しかし、最たるストレスは子どもたちや実践者に向けられる他者からの不寛容で批判的な眼差しである。教室の外から「ちゃんとさせろ」という視線を向けられたとき、教師は実践の岐路に立たされるのである。秦実践ではその様子が如実に同レポートに綴られている。秦はいかにして実践中に自己に生じる軌轢を越えていくのか。

秦は4月当初から、朝の健康診断では体調の善し悪しだけでなく、びっくりしたこと、うれしかったことなどを付け足して発表する子たちに15分の時間をかけて丁寧に付き合う。帰りの会では2年1組のよいところというコーナーを作り子どもたちに自尊感情を高める取り組みをしたり、遊び、生き物、かざり、ものづくりなど子どもの混じり合いを生み出す係活動も展開していく。こうした豊か

な取り組みを通してトラブルを起こしながら(起こさせながら)も子どもたちは関係性を深めていく。しかし、同時に秦の中に焦りも生じさせた。隣のクラスと比べても自分のクラスは落ち着かず、トラブルも減らないからだ。

そんな6月にルナ、ダイキ、ハルオが廊下で水遊びをしていることが問題となった。おかげで廊下は水浸し。それを冷ややかに見ていた他学年の教師の視線のもとで、秦は自分の心の中を「"あいつら"という思いが心の中を満たしていた。すっかり冷静さを失い、うちのやんちゃが迷惑をかけてしまって、、、うちのクラスだけがこのような子どもになってしまっている。まったくうちのクラスの子は言うことを聞かない悪い子ばかりだ!という思いが爆発した」と綴っている。秦のこのような気持ちに陥った要因には間違いなく、他者の冷やかな視線、他クラスと自クラスとの比較があった。

4) 内的葛藤を乗り越え子どもの見方を変える

多くの場合、このような感情に陥った教師は声を荒げ威圧的な指導をしてしまうことになる。秦も同様であった。しかし、秦実践の注目すべきは、そこに終わらないところだ。

怒りを爆発させる指導を行った自分を悔いた後、秦は自分の指導に従わない理由を、「教師の指示よりも自分の興味のあることが目の前にあっただけではないか」と分析し、まずは彼らの目の前にあって気になった楽しかった出来事や、ものに共感することが大事だと思うに至る。秦は落ち着いたクラスを前に3人を排除しそうになっていた自分を客観視するとともに、子どもを抑圧し、攻撃的に排除しそうになる自分と闘うことを決意する。それまでとは違う新たな教師として、子どもと「出会い直し」た出来事であった。今まで幾度も子どもの否定的な行動の裏にある本人の願いに目を向けることで実践の軌道修正を行ってきた実践者だからなせる自己変革であろう。

5) 子どもとの「出会い直し」が教師にもたらすもの

秦はこの後子どもたちと会いたくなり、職員室でじっとしていられなくなって学校から校区に飛び出していく。するとお手伝いでポストに郵便物を入れにくるルナに出会う。そこでルナが引っ越してきた時のことを話題にし、「引っ越ししてくれてありがとう。だって引っ越してこなかったら先生ルナと会えへんかったやん。先生、ルナがいないクラスなんて楽しくない」と伝え、ルナは笑顔で応じる。何とも言えない素敵な場面である。自分の内心をかき乱す課題の大きな子どもを前に、どれだけの教師が「引っ越してくれてありがとう」と言えるだろうか。そもそも、今回のような事件が起これば、多くの場合怒りを消化するために職員室で文句を言って終わるか、管理職や生指主任に相談して親を呼び出し指導するという事に留まってしまい、子どもに会いに学校の外へと飛び出して行くことなどしないだろう。

秦はこの出来事を「神様はいるもんだ」と表現している。しかし、偶然では決してない。子どもたちを怒鳴った後、秦は冷静になり、子どもたちの行動の意味を捉え直し、自分の指導がズレていることに気づく。こうなると自然に掛けた言葉も浮かんでくるので、職員室にいても経ってもいらなくなる。子どもたちとの指導によってできたズレを修復すべく自らの足で子どものもとに出向くからルナとの素敵な出来事は起こり得るのだ。このような自らの変容によって必然的に訪れる素敵な経験は教師の仕事に彩りを与えてくれる。子どもとの「出会い直し」は指導内容だけでなく、その後に訪れる教師の経験をも変えることになるのだ。

「出会い直し」を通して訪れたルナとの出来事に秦はエネルギーを得ながら実践は個人指導を深化させていく。

6) 課題の大きな子への配慮と指導

個人指導は深化すればするほど、教師に軋轢を生じさせる。

カンナのキラキラ光る玉が入った瓶が割れて、中の玉が無くなるという事件がクラスで起こる。どれだけ聞いても玉の在処が分からない。秦は子どもたちに事情を伝え、お道具箱そしてランドセルの順に確認していく。その間、不自然な様子を見せるルナに疑い持ち、そして疑いを確信に変えながら確認を続けていく。果たして玉はルナのランドセルの中にあった。瞬時の判断が迫られる場面である。秦は「見つかった」とはみんなの前で言わずに、ルナ以降のランドセルも確認していく。そして廊下に出てルナのランドセルにあった玉を廊下に転がし「ここにあった」という。

ある学習会では、荷物を点検する行為や、廊下にあったと虚偽の事実を作り出したこと、被虐待児の可能性のある子を追い詰めるような指導のあり方に批判の声が上がった。しかし、この場面において秦による「みんなの前でルナを傷つけるわけにはいかない」という徹底したルナへの配慮を見逃してはいけない。通常、ルナのような幼児性を色濃く引きずる子は自分の中にある未成熟な部分を守るため、例えば出来そうも無いことから逃げたり、平気で嘘をついたりする。もしこの場面でルナのランドセルから玉が見つかったとなれば、ルナはみんなの前で嘘つきとして晒され大きく傷つくこととなり、防御反応として激しくアクティングアウトした姿を見せることも予測ができる。秦は、ルナの様子から犯人である事を感じ取り、瞬時に彼が傷つかない方法で問題を解決した。嘘をついてまで自分を守る秦にルナは何を思っただろう。

しかし、秦の指導はこれで終わらない。その後ルナと以下のやり取りを行う。

以下レポート抜粋

T「ランドセルに入っていたのを見つけた。欲しかったん？」

ルナ「知らん。」

T「もういいから正直に言いなさい」

ルナ「とってない。誰かがいれたかもしれへん」

T「そんなわけないやろ。やったんやろ。」

ルナ「やってない」

T「もういい。分かってる。」

ルナ「誰かがした」

T「誰がやるんや！」沈黙がしばらく続いた。

T「分かった。本当のことを言ったら、このことは、先生との二人だけの秘密や。でも、うそをつくと後でとんでもないことになるで。」

しばらく沈黙が続いた。ルナの目からは、涙が溢れてきた。

ルナ「隠した」

T「えらい。正直に言えたな。欲しかったんや」

ルナ「うん」

T「じゃあ、このことは後は先生にまかしとき。相手の親にもうまいこと伝えておくれ、ルナがしたことは誰にも言わへん。これからは、先生には本当のことしゃべってな。やってしまったことは、仕方ない。でも、隠すのは良くない。正直にやってしまったことは言ってほしい。うそをつかれる方が先生は傷つく。ルナは、今までにきつく叱られることがあったから、うそをつくようになったの？」

ルナ「うん」

T「お父さん？お母さん？」

ルナ「どっちも怒ったらこわい。」

T「だから、バレないようにしようとしてるんや」

ルナ「うん」 T「悪いことしたら、お家の人に怒られて嫌われると思ってる？」

ルナ「わからん」

「わかった。先生は、ルナが悪いこととしても嫌いにはならへんしな」

ルナ「うん」

涙目になっていたルナの頭をなでてから教室に返した。

絶対にルナを守る存在としてその姿勢を見せた秦だが、今度は事実を言わせようとはぐらかすルナに厳しく迫る。育ちの中で幼児性をそぎ落とせず今に至り、傷つきを回避するために嘘をつき自分を守ってきたルナにとって、事実を言うことは未成熟さを曝け出すことになり容易ではない。しかし、これまで徹底して自分を配慮してきた秦を前についにルナは正直に答える。「隠した」と涙を流し、心震わせながら告白したルナを秦は叱りつけることなく、物を取ったり、嘘をついたりするルナであっても嫌いにならないと、まるごと受け止める他者としての姿勢を見せる。秦が自分とはどういう人間かを示すこの指導は、ルナにとってどんなことがあっても徹底して応援してくれる大人との出会いとなる。

秦は、ここまでのルナへの丁寧な関わりと分析に基づいて、ここを勝負と一步も譲らない強い姿勢で指導に挑んだ。しかし間違えてはいけないのは、事実を言わせることが最重要ではないということだ。教師がまだ信頼できる他者になり得ていない場合、最後まで子どもが嘘をつき通す場合も十分考えられる。決して事実を言おうとしない子どもを前に、実践者は激しく揺れ、力や圧力で事実を言わせようとする衝動に駆られるに違いない。ここにもまた、実践の分岐点が訪れる。実践者は軋轢が生じるごとに子どもをどう捉えられるかが試されるのである。例えば「ここまで嘘をつき通さなければならぬ彼は、本当にしんどいだろうな。それだけ今まで傷ついてきたんだな」というように捉えることができるかどうか。このように捉えられればこそ、課題の大きな子への共感的な指導は可能となるし、何よりそのように自分を受け止める他者であるから教師への信頼感は醸成していき、事実が本人によって伝えられるのである。

7) 学級の成長と楽しい学校

ルナはその後、授業中、机の下にパーカーのフードを被って潜り込んでいるところから自分の聴覚過敏がクラスに明らかになり、クラス全体にルナ自身の事情を受け止めてもらうという経験をする。ハルオとルナのマスクを巡るトラブルでは、二人の気持ちの行き違いをクラス全体の場で話し合い、「みんなで成長するクラス」とはどういうことを全員で考えた。ルナとダイキが得意にしているダンスを運動会の演技に決定し、ルナ、ダイキ、ハルオがリーダーとして大活躍する。学校に来られないネネには、家庭訪問を通じて、母の思いを聞き取っていく。関東出身の母は身寄りも無く、ネネと二人生活の背景と、ネネの幼稚園時代の閉ざされた生活経験を知り、秦はそのことをクラスに開いていく。そんな中で、ネネのしんどさに共感する子ども、例えばルナは「手紙をかきたい」とネネと繋がろうとする子が現れ出す。

二学期も、生活科のおもちゃフェスティバル、お誕生日会と楽しい取り組みが続く。極めつけは複合的に楽しい取り組みが続く「いっしょに遊ぼう真冬の大冒険」である。その一つであるクリスマス会では、世界中を旅したサンタが道に迷って小学校にやってくるというムービーを作る。クラスで視聴し最後には本物のサンタがクラスに登場。係がこっそり作ったプレゼントをみんなにサンタが配った。振り返りでは各々がみんなが楽しめて良かったと書いていた。ネネは参加できなかったが、真冬の大冒険の取り組みは写真や映像でいつも見ていた。そして、ネネ自身が自分の自己紹介ムービーを作成し、その視聴を通してネネとクラスとを繋げていく構想へとせり上がることになる。

秦は、自身に生じる軋轢や葛藤を乗り越えながら、課題の大きな子たちの成長を足がかりにして、クラスを更に成長させていくのだ。

8) 確信を持って子どもの側に立つ教師になぜなれるのか

なぜ秦には実践過程に訪れる自分の中に生じる葛藤や軋轢を乗り越える実践ができるのか。それは先に述べた秦のこれまでの教師経験に他ならない。

龍の実践に話しを戻す。再度龍に寄り添う決意をした秦であったが、その様子を見かねた管理職は秦に担任交代を言い渡した。まさに子どもの側に立とうとする教師を排除する判断である。担任の交代を知らせる保護者会で秦は頭を下げ謝罪し、新たな担任が告げられ会は終了するはずだった。しかし「龍の家庭は1年生のころからしんどかった。それに対してなんの対策も取らずにほったらかしにしてきたから、こんな状況になった。秦先生は、今年転勤してきてよく頑張っておられる。交代するのは、校長と教頭ではないですか」との声が保護者から上がる。その後、観察期間を経るという条件付きながらも、秦の担任が継続することになったのだ。大きな拍手とともに教室から送り出される秦ではあるが、課題の大きな子龍を中心に据えた学級内の豊かな実践によって学校が「楽しい学校」に変わり、子どもたちのみならず保護者からもそのようなクラスづくりを行う秦が支持された結果だった。

子どもを排除しそうになった時、秦の脳裏にはいつも裏切られ、傷つきスリッパを投げつけてきた龍の姿が浮かぶ。管理職に背いてまで龍に寄り添い続けた結果、圧倒的に自分を支持してくれた保護者の姿が自分を励ます。数多の葛藤と軋轢を越えながら最も課題の大きな子を排除せずに「自分も楽しいと思える学校」をつくった経験によって、今の自分があるという確信が秦を子どもの側に立つ実践者にするのだ。

秦は自身が記した文章で力強くこう述べる。

今、教師の魅力がなくなり、志願者も減っている。教師の魅力は本当になくなったのであろうか？制度的にはそういった部分はあるかもしれないけれど、根本的には変わらないと思う。10年前も今も子どもとの出会い直しや失敗はある。けれど、子どもの喜びは私の喜びであり、子どもの傷つきは私の傷つきになっていることに違いはない。一発逆転はない。一発逆転に見えるようでも、それまでの地道な子どもとのやり取りと、自分の指導の修正が繰り返された結果だと思う。しかし、どの教師もベースになる自分のスタンスはあった方が良く思う。私は、先にあげた2つである（「子どもの行動にはかならず理由やその子なりの願いや傷つきがある」「絶対に排除せずに、関わりつづける」）。この2つがあるので、失敗はあるけれど、いつでもやり直せる。やり直せるということは、その先に、希望があるということだと思う。その希望がもてる限り、教師の魅力はなくなるらない。

5 最後に

教師としての規範であるとか、求められる立ち振る舞いは一定必要である。しかし、目の前にいる子どもの姿から目を背け、スタンダードに依拠し感情労働者として子どもを指導することは、もはや自身を疎外し傷つけることにしかならない。そんな実践を行うよりも、サークルの仲間達のように子どもたちの姿や言葉を真摯に受け止め、悩みながらも粘り強く実践することが、間違いなく楽しいと思う学校をつくることに繋がるのだ。その経験が、原体験となって私たちを励まし続けてくれることが秦実践は伝えてくれる。私たちは自信を持って実践し続けていくべきである。言い換えるなら、Kの世界を自信を持って生ききるべきなのである。

子どもの側に立つ教師は常に軋轢の中を生きている。軋轢は、子どもとの出会い直し、そして自分自身との出会い直しを通じて乗り越えていく。そして、軋轢を乗り越えた先にある楽しい世界を、子どもの声に耳を傾けながら共に創り出していく。そんな実践を今まで通り仲間と共に、そして旺盛につくって行こう。(文責・阪上)